様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３６１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６４６３２６９

研究課題名（和文）臨地実習で活用できる学生間ケアリングの技術習得プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of technical program for caring of students to use in practicum

研究代表者
佐原　玉恵（Sahara, Tamae）

徳島文理大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：５０３３５８２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：学生間のケアリング技術習得プログラムの試案を作成した。臨地実習グループの学生間の関係性構築のプロセスに着目し、得られた概念を基に作成した。骨子は場面ごとに作成され、個人、グループ、システムに分けられている。①個人：コミュニケーション能力、他者への配慮、他者を受け入れること、妥当な自己評価。②グループ：コミュニケーション、協力、情報交換、意見交換、役割の認識、自分の立ち位置が俯瞰できる、メンバーへの注意ができる。③システム：グループとしてやり遂げる体験、グループで協力する体験、体験を共有し共感できる体験を設定する、学力による、メンバーの構成、コミュニケーション能力によるメンバーの構成を配慮する。

研究成果の概要（英文）： I created a program for caring of among students to use in practicum. Focusing on the process of establishing relationships among students of group during practicum and based on the concepts obtained. The main points are created for each scene, divided into individuals, groups, and systems. ① Individual: Communication skills, consideration for others, accepting others, reasonable self evaluation. ② Group: Can communicate, cooperate, exchange information, exchange opinions, recognize roles, be able to overlook the position of yourself, attention to members. ③ System: Consider the experience of accomplishing as a group, experiencing cooperation in groups, setting experiences that share experiences and can sympathize, organization of members by academic ability, membership by communication ability.

研究分野：母性看護学

キーワード：看護学生　臨地実習　ケアリング　看護教育　体験　関係性　グランウンデッド・セオリーアプローチ

１．研究開始当初の背景
近年の看護学生の傾向として、社会性に乏しく、日常生活上の体験が少ない、そのことが対人関係の持ち方に影響し、実習に対して積極的になれないということがある。また、ストレスに対して耐性が弱い傾向がある。当該大学でも、４年間の内に１割弱の学生が転学部、退学などの進路変更を余儀なくされている。その中で実習期間中に進路を変更するものもいる。臨地実習がクリアできるかが、その後の学習や進路に大きな影響を与える。実習期間中、実習グループの中で、学生間にさまざまな関係が築かれている。学生間の関係が良好であると、互いにサポーティブな関係が築ける。その実態をケアリングの視点から明らかにし、学生間のケアリング技術を習得させることが学生への支援に結びつけることができる。

２．研究の目的
学生間ケアリングの技術習得のプログラムを開発すること。

３．研究の方法
①臨地実習における実習グループの学生間の関係性について構築のプロセスを明らかにする。
　本研究の，理論的基盤を，ストラウス，グレーザーが影響を受けたブルーマーの象徴的相互行為論においた(H,Blumer.:1969/後藤将之:2010)．研究方法は，実習グループ内でのメンバー間の関わりから，グループの関係性を構築するまでのプロセスを明らかにするために，Strauss & Corbin（1998/2004）に基づいた戈木（2014）のグラウンデッド・セオリーアプローチ（以下GTAという）に準拠している．特に戈木が指摘する社会現象を実習グループ内の関係性ととらえ，その「プロセス的側面」に焦点を当てている。
１．研究参加者
A大学看護学科4年次の学生で，平成26年度及び平成27年度に3年次の６領域（母性，小児，精神，慢性期，高齢者，急性期）実習を終了した学生である．
２．データ収集期間
　平成26年6月～11月，平成27年7月～10月であった．
３．データ収集方法
研究参加者を対象に半構造化面接を，３年次の領域実習の評価後に実施した．面接は個室で行われ，学生が自由に話せるように配慮した．実施する前にICレコーダーへの録音の許可を得て，インタビューガイドに沿って，実習グループ内での出来事や体験について，自由に話してもらった．
３．分析方法
データ分析は，Strauss＆Corbin（1998/2004）及び才木（2014）らのGTAの手法を用い以下の手順で分析した．
①データをすべて逐語録に起こし，通読して意味のある内容ごとに切片化した．
②切片の内容をプロパティ（対象や行為の特性）とディメンジョン（次元：特性の多用な範囲）について検討し，それらの内容から意味内容ごとのラベル化を行った．
本研究では，平成26年度の参加者7名のデータから「実習グループ内の学生の体験における，グループメンバーとの関係性に注目し，その場面での学生の思いや行動の根拠になった体験のプロセス」を重視し，その後のデータ収集分析を行った．
③参加者のデータより，類似した内容のラベルからカテゴリーを生成した．参加者の語りの中に時間の経過を示す内容が見られたため，学生の体験をプロセスとしてとらえ、カテゴリーごとのプロパティとディメンジョンに注目し，軸足コーディング（概念/カテゴリーをお互いに関連付けていく作業）を行った．
④さらに事例ごとのカテゴリー関連図を作成し全体像をつかんでから，コアカテゴリーをとらえた．
⑤事例ごとのカテゴリー関連図，プロパティ，ディメンジョンに忠実にストーリーラインを書き，それぞれの事例を統合したカテゴリー関連図を作成した．⑥統合したカテゴリー関連図から，最終的なストーリーラインを導き出した．
なお，分析の妥当性を確保するために，対象者ごとに精読し，切片をラベル化するときに何度も元データに立ち返り確認をした．また，看護学教育の研究に精通した研究者と納得のいくまで協議した．不明確な内容の解釈には研究参加者に確認をすることで，結果の妥当性を確保するように努めた．
②学生間の関係性構築のプロセスより導きだされた概念より、ケアリング技術習得プログラム骨子を試案する。

４．研究成果
①研究成果
　研究参加者は12名（平成26年度7名，平成27年度5名）であった．面接に要した時間は1名平均40～50分であった．12事例のうち，語りの内容が深まらずストーリーラインが描けなかった1名を除き，11事例に関して概要を説明する．看護学生の実習グループの関係性を構築していくプロセスは，自分が所属するグループに対して感じた印象から始まっていた．まず，実習初期において，グループメンバーがどのような存在になるのか予測できないため，学生にとって《グループの印象》は重要な体験であった．すなわち，肯定的に捉えた場合は，積極的に関係を作る努力をする，関係を作るために気遣いをする．しかし，否定的に捉えた場合は，メンバーとの関係を築くことに困難を感じていた．
　学生が肯定的に捉えた場合は，《メンバーとの関係を築く努力》をし，その過程で、自

然に《役割分担》が行われていた．ここでの《役割分担》は，質問することが多い学生，周囲への気遣いができる学生，意見を聞いてまとめることができる学生などであり，リーダーやサブリーダーなどの役割名称にとらわれない自然な《役割分担》であった．そして，自然な《役割分担》が《活発な意見交換》に影響していた．つまりメンバーが《役割分担》をすることで，質問や相談をする学生、それに応える学生、別の視点から意見を言う学生、意見をまとめる学生などの役割を分担することで，《活発な意見交換》が行われるため，実習は，より刺激的で学びの多いものになっていた．そこでは情報，知識，感情の共有などが行われ，互いに共感しあい，感情や体験の【共感・共有】につながっていた。そして，《グループの良好な関係》へと帰結した．

一方、学生が《グループの印象》を否定的なものと捉えた場合は，《グループ関係を築く努力》ができずに，関わりを避けるためにメンバー間に《適当な距離を保つ》ことになる．したがってメンバー間で接近することが難しく，《活発な意見交換》は得られず，《現状をやり過ごす》ことをしていた．そのため，学生間の感情や体験の【共感・共有】も得られないことから，《グループの関係性の悪化》へと帰結した．１．臨地実習における学生間の関わりで生じている現象に関連する概念看護学生の実習グループの関係性を構築していくプロセスはグループメンバーとの【共感・共有】を得るかどうかが関係していることが明らかになった．

そして，分析の結果【共感・共有】という現象及びこのコアカテゴリーに関連する《グループの印象》《メンバーとの関係の築く努力》《役割分担》《活発な意見交換》《適当な距離を保つ》《現状をやり過ごす》の６個のカテゴリーが抽出された．コアカテゴリーである【共感・共有】に至るまでのプロセスと【共感・共有】からグループの関係性が構築されるまでに学生間のケアリングが行われていることが推測された．

②学生間のケアリング技術習得プログラムの試案を作成した。A 大学４年次の学生に対して質問紙調査を行った。85 名に質問紙を配布し、回収率 96.5%有効回答率は 93.9%であった。

主成分分析を行い、成分の負荷量が 50%以下の項目を除去し、再度分析を行った結果、７つの成分が抽出された。第１成分の因子負荷量は 33.63%、第２成分が 10.47%であったためこれらの下位概念である２２項目の内容を中心に教育プログラムの内容を検討した。

教育プログラムの骨子は、個人で行うもの、グループで行うもの、システムで調整すべきものの３つの柱とした。内容については質問紙調査の内容を基盤として、ケアリングに関する文献、研究者間で必要と考えられた内容をなどから作成した。臨地実習グループの学生間の関係性構築のプロセスに着目し、得られた概念を基に作成した。骨子は場面ごとに作成され、個人、グループ、システムに分けられている。①個人：コミュニケーション能力、他者への配慮、他者を受け入れること、妥当な自己評価。②グループ：コミュニケーション、協力、情報交換、意見交換、役割の認識、自分の立ち位置が俯瞰できる、メンバーへの注意ができる。③システム：グループとしてやり遂げる体験、グループで協力する体験、体験を共有し共感できる体験を設定する、学力による、メンバーの構成、コミュニケーション能力によるメンバーの構成を配慮する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計３件）

①<u>佐原玉恵、細川つや子</u>、臨地実習の実習グループにおける学生間のかかわりに関する研究、日本看護研究学会　第 41 回学術集会プログラム・抄録集（於：広島）2015

②<u>佐原玉恵、細川つや子</u>、A study on the relationship of nursing students within a traning group at nursing practicum、第４回世界看護科学学会（in Hannover）program book　2015

③<u>佐原玉恵、細川つや子</u>、臨地実習におけるグループ内での学生間の相互行為に関する研究：日本看護研究学会　第 42 回学術集会プログラム・抄録集（於：つくば市）2016

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
佐原玉恵（Tamae Sahara）
徳島文理大学　保健福祉学部看護学科
准教授
研究者番号：50335824

(2)研究分担者
細川つや子（Tsuyako Hosokawa）
姫路大学　看護学部　教授
研究者番号： 00278996

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)